

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 3 月 28 日

所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生 3 年
氏名	齋藤 美保

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
滋賀県奥伊吹スキー場、新潟県妙高市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
スキー事前練習と笹ヶ峰実習 (積雪期)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 3 月 6 日/ 3 月 22 日~3 月 26 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
杉山教授、松沢教授、幸島教授、福島特定助教
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>積雪期の笹ヶ峰への参加は今回で 2 回目であった。前回もなかなかハードな内容だったと記憶しているが、今回はそのもっと上をいくハードな内容であった。</p> <p>無雪期の笹ヶ峰は秋に来ており、その時と比べ、また前回の積雪期と比べ最も印象に残っている感情は、冬山は怖い、という非常に基本的なものである。三田原山の登頂を目指していた際、頂上に近づくとつれ、木がまばらになり風が強くなり吹き付け、周りを見渡すとこんなに高くまで登ってきたのかと圧倒された。後ろを振り返ってみると傾斜がきつく、真っ白な雪面が広がっているだけで、バランスを崩すと一気に下まで滑り落ちてしまいそうであった。そこで恐怖を覚え、後ろを振り返らず頂上まで歩き切ろうと決めた。また、知らず知らず雪庇の上に立ってしまっていたり、不注意が重大な事故につながる場面が、無雪期よりも、また平地だけを滑っていた前回の積雪期よりも多かった気がする。</p> <p>最後の振り返りの会でメーガンが指摘した、ヘルメットの重要性を認識する機会が私も多々あった。木立の中を滑っていると、他の滑走者の姿がよく見えず、井ノ上さんと一度接触した。また、横から伸びていた枝に気づかずターンした時にそれが顔面に当たったこともあった。今後三田原山に登るチームが出てくるならば、ヘルメットは必須の装備だと感じる。</p> <p>上の文章からはキツかった場面しかない実習だったような印象を与えそうだが、頂上から見た景色は最高であったし、それは今までの実習では得られない景色であった。正直 2 日連続で頂上を目指して登ると聞いた時は、ホントに?と思ったが、今は頂上まで登り切ることができて良かったと思う。おそらく私は牧場周辺をずっと滑っていたら飽きていた気がするが、頂上から一直線に滑ることができ、爽快な気分を味わうことができた。それに加えて今回の実習ではより自然の厳しさを実感した実習になった。</p> <p>山スキーは今回で 2 回目の計系である。前回滑った雪面は多少の起伏はあったものの、傾斜はそれほどなかった。あったとしても数分歩いたら傾斜がゆるくなるような箇所しか滑らなかった。しかし今回は、気を緩めるとズルズル一直線に下へ滑って行ってしまうような斜面を延々と登って行った。皆さんからのアドバイスも元に、一步踏み出すたびにしっかりと一本のスキー板に全体重を乗せ、つま先部分ではなく、ブーツの下つまりスキー板中心部に体重を集める意識を心がけると、</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2回目の登頂では1回目よりもよりスムーズに登ることができたと思う。

今回は福島さんが不在だったため、そういった意味でも滝澤さんがおられた前回とは違い個人的には大変だったが、きっとまた積雪期の笹ヶ峰に行きたくなる気がしている。



図1 初めて見る雪庇



図2 三田原山頂上から眺める山々

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディングプログラムの援助を受けて行いました。実習期間中、ご丁寧に指導して下さった杉山先生、松沢先生、幸島先生、およびプログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。福島先生も前準備のご対応ありがとうございました。